

～H27 シリーズ学習会&ワークショップ参加者の皆さまと共に～

振り返りの場

【目的】 リスクコミュニケーションは、関係する全ての人々の間での情報交換や意見交換を通じて、関係者間の相互理解を深める活動だと言われています。その「相互理解の深化」を実現するためには何が必要かを、シリーズ学習会およびワークショップにご参加の皆様と共に振り返り、話し合い、リスクミ職能教育PJ（カリキュラム形成）に役立てる。

【日時】 2016年2月26日（金）13:00～15:00

【会場】 北海道大学農学部 食資源研究棟 セミナー室 F319

【主催】 リスクミ職能教育プロジェクト（代表 小林国之）

【参加者】 シリーズ学習会とワークショップ参加の方々17名+プロジェクトメンバー2名

【進め方】

| | |
|--|-----|
| ＜説明＞ 開催挨拶(趣旨説明) 手順説明(リスクコミュニケーションの多様性を含む) | 10分 |
| ＜議論＞それぞれの立場でお話ください | |
| 1. グループでの話し合いで参加者は腹藏なく話すことができましたか？ ◆ポストイットに書く① ・できた／できなかった(どちらか) ・それはどうしてか(理由) ……5分 ◆書いたものを順に読み上げます ……15分 ◆互いに質問あったり発言したりする ……10分 ◆気づいたことをポストイットに書く② ①と②を壁の模造紙に各自貼る ……5分 | 35分 |
| 2. グループFと司会は話し合いに介入や誘導をしない方針で臨みましたが、如何でしたか？ 例)介入や誘導は、あった／なかった；少しはあっても良かったかも；ないほうが良い 等々 ◆1と逆の順番で感想や意見を述べ合う ……15分 ◆意見交換をするときにグループFはどんな風に振舞ってほしいかを書き③、貼る ……5分 | 22分 |
| 時間調整 | |
| 14:10～ 3. このような場で、専門家を含む関係者間の相互理解を深めるためには、何が必要か？ ◇記録者のお願い(明田川さん、平川さん、渡邊さん)～発言のメモ④ ◆各自が思う「相互理解が深まった」状況を述べ合う ……20分 ◆その状況が達成されるためにシリーズ学習会で足りないものを言う ……15分 ◆記録者による整理と参加者による追加(模造紙上) ……5分 | 40分 |
| ＜まとめ＞ 小林による総括と締めくくりの挨拶(途中、ひとこと言いたい参加者の発言 3分以内) | 10分 |
| 閉会 | 15時 |

人々に認知されたリスクの大きさに関しては特徴がある

リスクコミュニケーションの手法は画一的ではない

| 専門家 | 気をつけるべきハザード | 素人・一般市民 |
|---------------------------------|---------------|--------------|
| 11位以下 | 食品添加物 残留農薬 | 5位 |
| 10位 | | 6位 |
| 9位 | 健康食品・サプリメント | 11位以下 |
| 8位 | | 11位以下 |
| 4位 | 輸入食品 偏食や過食 | 11位以下 |
| 2位 | | 11位以下 |
| | タバコ | 11位以下 |
| 科学的データで判断 | リスク認知の特徴 | 価値や感情で判断する傾向 |
| 素人・一般市民のリスクの大きさについての認識(リスク認知)基準 | | |
| ①危害が破滅的 ⇒ 感情的に反応しがち ⇒ 大きく感じる | | |
| ②危害要因が未知 ⇒ 感情的に反応しがち ⇒ 大きく感じる | | |
| ③自分だけでリスクを制御できるかどうか | | |
| ⇒ 制御可能性とは自己決定権の問題…………… | | |
| ④リスクは自分達にだけ発生するのか(便益は誰が受けるのか) | | |
| ⇒ 公平性のことで、分配の正義の問題…………… | | |

迅速な対応が求められる場合

- O-157の集団食中毒が発生した場合⇒方向！
⇒一刻も早く既知の手法で、行政等による措置なども。

緊急ではないが、リスクレベルは、ほぼ明確に分かっている(十分なデータ有り)

- マグロの天然由来の水銀
⇒ 分かりやすい、正しい知識の普及が必要。
情報伝達に重みをおくタイプの啓蒙活動。

O-157の脅威を伝える
平時の衛生教育として
啓蒙タイプ

リスクに不確実性と社会的争点がある(十分なデータがない等)

- 遺伝子組換え作物や食品など
⇒入手可能な科学的知識(データ)と問題点を明確化し、
ステークホルダー利害関係者を含む関係者間の検討が
考慮される手法や対応が必要。
⇒単なる情報伝達では当然不十分である
→ 模索されている

食品中の放射性物質・内部被曝
データが
始めている

他……………

リスクコミュニケーションの変遷

- 第1段階 1970s～1985頃
単純に技術的な情報としてのリスクメッセージの伝達
リスク比較の段階/ 市民への説得
リスクの相対的大きさの比較
⇒ 上手くいかなかった。
原発のリスク ⇔ 自動車の
運転や喫煙のリスク
- 第2段階 1985頃～1995頃
受け手のニーズと信頼獲得の為の教育・宣伝・説得の段階
説得に効果的な心理学的手法やマーケティング手法の利用
むしろ反対運動。
信頼してもらえない
- 第3段階 1995年～
相互作用・双方向的意見交換の段階
集団、個人、組織間の情報と意見交換のプロセスと考え、関係者間の理解と
信頼のレベルの向上をもって成功の証と考える←昔、意図が受け入れられること
イタリア・セブンのダイオキシン流出事故(1976)
インド・ボパール化学工場事故1984→晩で死者2000人
原発事故:スリーマイル島(1979) チェルノブイリ(1986)

- EU/英国 2000s以降の傾向:事後対応⇒事前対応
英国での契機は1996年の2つの事件
・GMTマト(フレーバーセーバー) 反対運動
・1989年サウスウッド委員会報告ではBSEは人には感染しないとなった
が、1996年3月に感染する可能性を認めた⇒科学者の信頼喪失
⇒科学者コミュニティと一般の人達の対話の実践

<私たちの基本的考え方>

リスクのより適切な管理のために、社会の各層が対話・共考・協働を通じて、多様な情報及び見方の共有を図る活動。
典拠) 文科省 安全・安心科学技術及び社会連携委員会報告書(2014.3.27) 『リスクコミュニケーションの推進方策』

<リスクミで注意する点>

- 完全なリスクメッセージの発信
 - ・リスクの性質
 - ・リスクと引き換えにもたらされる便益
 - ・代替案
- ・リスクと便益の評価の不確実性(根拠のデータや仮定)
- ・リスク管理に関する情報
- リスクコミュニケーションを一つの結論を出すための手段としてはいけない
- 利害関係者・関与者・ステークホルダー間の多様な価値観を調整するという事は、画一化を図る事ではない。(図ってはいけない)
- 共感を生ずる場を創ること

典拠) IRGC 国際リスクガバナンス・カOUNシル

| コミュニケーション | 伝える内容 | 目的 | 方向 | 発動主体 | 参加主体 | 状況 | 期間 |
|-----------|--|---|-----|-------------------------------|------------------------------------|------------------------|----------------------|
| 科学 | 科学技術の活動内容(歴史的なものから最新のものや萌芽的なものまで)、成果や特徴など | 理解増進・普及、研究活動に対する支援を求める。 管理・統治のため | 双方向 | 科学者や技術者らの共同体。 メディア 市民団体 | 多様～科学者・技術者・学協会・科学館等・市民・メディア・企業・行政等 | 平時 ・日常 ・民主的手続き | 長期 |
| リスク | リスク内容(緊急性の程度や不確かさの程度、データの集積度など様々) リスクの背景とそれへの対応等。 ・正しい情報 | 適切なリスクメッセージを伝え、リスクを管理する為。 広義のリスクの管理と統治 | 双方向 | 科学者や科学技術者をひつくるめた共同体や行政。時に市民団体 | 多様 | 平時 ・日常 ・民主的手続き | リスク内容に依拠し長短。 短期は稀 |
| クライシス | 危機情報と行動指針及び指示または命令 ・後知恵で正確でない場合もあるが、行動が優先。 | 有事の管理 市民が適切な行動をとるよう誘導 | 単方向 | 公権力を行使する機関 | 公権力を行使する機関と市民。及びメディア | 有事 ・非日常 ・非民主的手続き | 短期 |

東京工業大学 朝麻佐志准教授によるまとめを参考にした <http://d.hatena.ne.jp/scicom/20110411/p1>